luv sic

道玄坂杏子

5'

　遊理の肌。陶器の肌。歩くだけで内側から破裂しそうに艶やかな肌。表情は薄い紗に覆われたようにぼんやり遠く、滅多に笑わない彼女は、それでも柔らかく、温かい。遊理は光だ。実体もなく空虚なもので満たされていて、その中にいる、孔弥のすべてが許される。ずっと触れたくてたまらなかった。ずっと触れたくて、触れられなかった。

　部屋の外では、雨が降っているだろう。

　部屋から雨のことを想うとき、孔弥は遊理のことを思い出す。あの日、遊理は傘を持っていなかった。そぼ濡れた長い髪が透ける頬にべったり張り付いて、そのコントラストがあんまり鮮やかなので、色彩の明度が低い景色の中でそこだけ、モノクロームの写真のように際立っていた。遊理の色、白と黒、そして灰色。遊理、ユーリ。

「何を見ているの」

　遊理の、不安定に輪郭を変える唇が動いて言う。

「私を見て」

　孔弥はその命令に従って彼女を見る。少し離れすぎた両目の間、そして片目ずつ。とび色の瞳の中央にある、黒の領域にいる自分の影。ぼさぼさの髪、無精髭、背後の真っ白な壁、シーツ、その球面に読みとれるものは全部、その目に映った遊理の姿さえ。遊理の瞳の中の孔弥が動き、孔弥の瞳の中で遊理は唇を突き出した。遊理の瞳の中で孔弥の唇が動き、

「ああ、目が回る」

　孔弥の瞳の中で遊理が瞳を閉じる。乾いた唇の温かい感触が、往復運動の環の中から孔弥を救い出す。

「目を閉じないでね」

　再び目蓋を開いて遊理は言う。

「ちゃんと、私を見て」

　私を、全部。凍りついたように動かない孔弥の唇に、遊理は齧りつく。薄い桃色についた歯型を満足して見ながら、微かに瞬きをして孔弥を視界から占め出すと、ゆっくり起き上がる。少し天辺の尖った耳を澄ませ、シーツから出て行こうとする遊理の手首を引く。

「ポットが」
「勝手に切れるよ」

　孔弥はそう言って、遊理の掌に顔を埋める。

＊

　ユーリ、と呼ぶ孔弥の声を、遊理は遠くで聞いた。甘ったれたように鼻にかかった低い声は懐かしい響きだった。

　孔弥に呼ばれると、遊理は身体中から喜びが溢れだし、なにも考えられなくなってしまう。孔弥以外のなにもかもが自分とは関係ないどこかへ飛び去ってしまうみたいに。髪の毛が逆立 ち、背中に電気が走ったようにビリビリしてくる。遊理は震える。孔弥の灰色の瞳と、おいしそうな赤い唇を思って、震える。

　遊理には、愛がわからない。遊理には、悲しみがわからない。遊理には、地球がわからない。遊理には、お話がわからない。遊理には、人間がわから ない。遊理には、犬もわからない。遊理には、赤ちゃんもわからない。遊理には、空もわからない。雨もわからない。オーロラもわからない。遊理の頭の中は、あの日からずっとわからないことだらけだ。

　でも、遊理は孔弥の声が好きだ。すきだ、とささやく孔弥の声が好きだ。お腹すいたと嘆く孔弥の声が好きだ。遊理は、孔弥が好きだ。孔弥にはすべてを見てい てほしい。細い睫毛の奥にある灰色の瞳で、爪先から頭のてっぺんまで、眠るまで、眠っていても。

　両脚の間に孔弥の黒い頭が沈んでいくのを感じて、少し後の濡れたような質感に身をよじって笑う。

「くすぐったい」

　孔弥は顔をあげて困ったように遊理を見る。乱れた髪、まばらで短い髭、灰色の瞳。その真っ赤な唇が遊理の太腿に触れると、無精髭が一緒になって柔らかな肌 に触れる。細かなとげが刺さったような感触に困惑したまま、遊理は孔弥の腕からは逃げられないことを知っている。どれだけ体をひねっても、その腕からは逃 げられない。遊理より少し太いだけなのに、遊理よりずっと強い。

　その腕が見事に調和のとれた力で引くので、遊理はベッドから出られなかった。だからポットを切る代わりに孔弥の腕の中で愛し合った。愛し合うときには、少しかしこまったように孔弥が遊理の中に入って来る。孔弥は優しい。少しずつ遊理を満たしてくれる。泣きそうになる遊理の耳たぶをかじる。遊理は目を閉じる。孔弥が遊理の中にいるのを 感じたくて、目を閉じる。段々、孔弥と自分の境目がわからなくなる。孔弥。

「コーヤ」

　どこに行ったの。

「ここにいる」

　遊理は目を開く。孔弥の灰色の目が映る。コーヤ、と遊理は言う。

「好き」

　孔弥の目が細く眇められ、その唇が僕も、と動く。

2

遊理と孔弥が同じベッドに寝るようになった日から、ずっと雨が降っている。今も雨が降っているだろう。

部屋には窓がない。全体はひどくぼんやりしていて、曖昧な部屋の領域が茫漠と広がっている。遊理と孔弥の眠るベッド、食事をする木製のテーブルと椅子、キッチン、それぞれは確かにあって、触れることもできるのに、その全体となると、途端に覚束なかった。それでも、二人は確かに部屋の中にいる。雨の音は聞こえず、ノイズは空想のどこかに置き去りにされたままで。

今、部屋は明るい。晴れた日曜日の遅い朝みたいに、光り輝いている。時折部屋は緩やかに明度を落とし、淡いクリーム色から、混濁したダークブラウンに、そして懐かしいあの星空の下のような、藍色の光で満たされる。部屋は遊理と孔弥を包み、守り、まどろみを与えながら養う。

沸いたポットを放りだしてひとしきり愛し合った後で、孔弥は遊理の臍の上でうとうとしていた。全身から、背中から、頭のてっぺんまで、痺れたように心地よく疲れて泥のように眠りの中に引きずり込まれた。遊理のひやりとした肌、ぺたりと吸いつくような肌の上で孔弥はまだ幼い頃の母親と話している。心地よいせいか、孔弥はそれが胎児であることに気づかなかった。胎児はゆっくりと目を開き、孔弥に言う。

ダ、ダ。

目を開くと、遊理はキッチンへ行ってしまった後だった。遊理の、甘いような、少し酸っぱいような匂いが残るシーツの上で孔弥は大きく伸びる。シルクが衣擦れのきゅ、という音を立てる。音はすぐに消え、代わりにキッチンから、遊理の気配がする。部屋は大きくもなく、小さくもない。狭くもなく、広くもない。必要なものが、必要な分だけ揃い、不足も、余りもない。

＊

「ハムエッグは好き？」

　白い丸皿にぽつんと盛られたハムエッグ、目玉はひとつ、赤身のハムの端っこが焦げて、ちりちりしている。

「野菜が食べたいな」
「レタスがあるの」
「水っぽいだろうね」
「レタスは、水っぽいわね」

　遊理がそう言ってキッチンの向こうに消えている間に、孔弥がテーブルを簡単にセットする。白い皿の隣に銀色のナイフとフォーク、飲み物のためのグラス。孔弥は 冷蔵庫からミネラルウォーターとオレンジジュースを出すと、テーブルに置いて、セットを終える。ほどなく、小さなレタスを手に遊理が戻って来る。　薄緑色 の縮れた葉が載った丸皿は、少しだけ華やかになる。

「トマトが食べたい」
「そのうち見つかるよ」

　孔弥が目玉焼きを放り込みながら言う。

「近いうちにね」

　オレンジジュースをグラスについで、一気に飲み干す。

J

　こんなふうに遊理と過ごすことになるずっと前から、孔弥は遊理が好きだった。そのとき遊理は孔弥を知らなかった。出会うよりずっと前に、さだめられた何か、運命のようなものを、孔弥は信じていなかった。遊理は、さだめられた何かはないとしても、抗えない何かはあることを知っていた。

「オーロラって見たことある？」

　孔弥が初めて遊理に話しかけたとき、彼女は答えずに問い返した。机が隠れるくらい大きな写真集の見開き一面に、赤と緑のオーロラが広がっていた。孔弥がないと答えると、遊理はまっすぐ前を向いたまま、「私、オーロラが見たい」と言う。なぜと問うと、少し顔を傾けて言った。

「わからないから、オーロラが好きかどうか」

　そして、たぶん好きだと思う、と言った。

　今二人はオーロラの下にいる。部屋のみる夢。上向くと感じる眩暈、眩暈の向こう側の空、紫色の、それとまるで世界の終わりみたいな、大きな熟れすぎたスモモ、オレンジ色の月。果ての風景。遊理がそうして初めてオーロラを見たときの感想は「綺麗ね」だった。

「とても綺麗」

　全天を覆う青緑色のオーロラを吸い込むように見上げながら遊理は言う。

「オーロラは好き」

　そう付け加えるのを忘れずに。遊理の唇のように不確定に形を失いながら色彩は遷移する。緑から赤へ、赤から濃い紫へ、そして視覚の外へ。

3

　なんて静かなんだろう。雨の音は聞こえない。でもきっと、雨は今も降り続いている。微かなノイズを探るようにして、遊理と孔弥は目を閉じる。

「なんて静かなんだろう」

　もうずっと、静かだ。部屋の中にあるのは、遊理か孔弥がたてる音だけだった。ときどき、冷蔵庫のがたん、と身震いするような音や、ぱちん、とはじけるような音がする以外は、静かだった。自分たちの上下に、左右に、同じように部屋に閉じこもり二人の愛を確認する人たちがいたとして、遊理も、孔弥も、その真実を知らない。この部屋には遊理と孔弥がいて、それでぴったり収まっている。多くもなく、少なくもない。互いを見、互いに触れ、嗅ぎ、味わい、聞く。希薄な存在の核心のようなところで響き合い、感じ合う。素手で心臓に触れるよりもっとずっと繊細で、奇妙なバランスをもった、確証のための作業を飽きることなく繰り返す。混ざり合い、溶け合い、あなたであり、私である。

　部屋はゆっくり光を落とす。濃い藍色の闇の中で、二人は眠りのあわいを漂っている。

4

　遊理の小さな悲鳴を聞きつけて、孔弥はベッドから這い出す。キッチンの向こうの菜園の中で遊理は隅にうずくまっている。白い腕だけが上にあがって、揺れている。

「なにか、ここに入って行ったの」
「なんだろう」
「このドアも、昨日までなかった」
「でも、今はある」

　巨大なキノコ型の電灯が逆さにぶらさがる農園の片隅、おそらく部屋の角にあたる部分で、遊理は小さな扉を見つけた。80センチくらいの高さの、木製のドア、優雅に曲線を描く小さな真鍮のドアノブ、同じ真鍮であつらえられたノッカーが鈍く光る。

「綺麗なドア」
「誰かいるかもしれないよ」
「誰もいないかもしれない」
「どっちにしろ、開けてみなくちゃ」
「開くかしら」

　孔弥はそっと扉を押す。澄んだ響きをたてて、扉が開いた。そして。

＊

　それから。
　扉の向こう側で見たものを、扉の向こう側を見たことを、遊理も孔弥も覚えていない。

　その扉のことになると、いつも二人は記憶があいまいになる。

「僕たちは扉を開けたのだっけ、開けてないのだっけ」

　扉のことになると、二人はいつもそんな調子だった。もう一度見に行けばわかるかもしれないのに、遊理も、孔弥も、そういうことをさっぱり思いつかない。一 日には流れがある。ひとつ何かが起こったら、その次に起こることは決まっている。そして前に戻ることはできない。先に進むことができないように。

「開けたと思うなら、開けたのよ」
「じゃあ、開けたのかな」

　話の後ろのほうになると遊理はたいてい我慢できなくなって、孔弥の膝の上に乗っかってしまう。長い髪がするすると孔弥の肌に触れて、流れ落ちた。

「私はコーヤが好き」

　歌うように遊理は言う。

「僕はユーリが好き」

　確かめるように孔弥が言う。そして二人は目を閉じる。何百回目かのキスするために。柔らかい舌の感触に遊理がうっとりする頃、孔弥は腕の中に温かな感触が沈みこんでくるのを感じている。

5

　遊理の首筋に沈みながら、孔弥はその質感の再現をしようと試みる。何度触れても、遊理は変わらない。何度触れても、同じ肌理、同じ匂い、同じ色だ。孔弥の髪はいつも硬く、遊理の柔らかな肌を傷つけ、うっすらと赤くする。そのがさついた掌も、乾いた唇も、骨ばった膝や重たいあばらも、いつも遊理の呼吸をちょうどよく圧迫する。

　最初に触れたとき、その均質な肌の質感に孔弥は驚いた。目の詰まったソーセージみたいだ。こすったら音がしそうだ。最初に触れたとき、そのごつごつした体の重みに、遊理は驚いた。骨と筋肉の重みが肺を圧迫して息ができない。その最初が今だとしてもよかった。それくらい、遊理も、孔弥も、互いを新しく感じる。繰り返し、互いの体を見つけ合う。

　二人がお互いの瞳の色を知ったのは、すこし後になってからだ。二人はそれまで、見つめ合うより触れあうのに一生懸命だったので。

　孔弥は遊理のいろいろなところに触れた。瞼や、耳たぶや、喉や、腋の下や、乳房や、背骨の上をなぞったり、その指でお尻をなでた後に膣の中に突っ込んだりした。遊理はびっくりしたように孔弥を見ると、どうしてそういうことをするの、と孔弥を責めた。

「ごめんね、嫌だったかい」

　孔弥は謝った。遊理は首を振る。

「順番があるでしょ、お尻から来るなんて」

　じゃあ嫌じゃなかったんだ。孔弥は嬉しくなって、今度は遊理のありとあらゆる場所をひっくり返すみたいに視線の前に晒す。

「見せて、全部」

　そうやって触れ尽くし見尽くした後で孔弥は一気に遊理の中に突っ込んでいった。そんなふう

に急に孔弥が入って来ると、遊理は息を吸い、ゆっくり吐き出す。遊理の中は温かい。遊理は柔らかい。どことなく、発酵中のパンの匂いがする。

　孔弥は、孔弥の触れたところは熱い。孔弥は裸になると、すべてがとても熱いのだ。指も、唇も、みぞおちも、背中も、腕も掌も指先も、足も、いま遊理の中にいる部分も、足の裏まで、全部とても熱い。

　体温が遊理と孔弥の間を忙しく行ったり来たりする間に、二人はお互いの流したものでべったり濡れてしまう。うつ伏せになった遊理の上で、孔弥はそんなふうに濡れてしまった遊理のお尻に触れている自分の体を感じる。動かなければ、まるで触れていないかのようにぴったりしている。ときどき、ほんとうに自分が遊理の中に沈み込んでしまっているんじゃないかと不安になるほど。

「眠い」

　遊理が孔弥に語りかけるとき、たいてい孔弥はもう眠っている。背中にそのずしりとした重みを感じながら、遊理もまた眠る。とても静かだ。なにもかもが、静まりかえっている。

2'

遊理は機嫌がいい。

「トマトを見つけたの」

そう言いながら、美しい赤色の実を孔弥に差し出す。菜園の新しい芽は、トマトだった。他に、今は実をつけていない苗がいくつもある。遊理も孔弥も名前を知らないような植物が、所狭しとひしめきあっている。水も、光も充分にあるこの環境の中で、彼らは生き生きしている。艶のある実をつけたトマトは、誇らしげでさえあった。

白い丸皿に盛りつけられたトマトの輪切り、胡椒と塩、酢とオイルだけのドレッシング、それなのに、なんて鮮やかな食卓だろう。遊理も孔弥も満足して食事を終える。

「いい一日だ」

遊理は次に実をつける苗のことを想い、孔弥は苗がどこから来たのかを想う。だが思考はいつも自分たちがここに来た時で途切れ、それ以上さかのぼることはできない。どちらにしろ、あるものを食べなくてはならない。それなら、何がどのように生まれるかなんて、考えても仕方ない。遊理も、孔弥も、部屋からは出られない。部屋から出たら。

「部屋から出たら」

どうなるのだっけ。部屋のことを考えようとすると、あの扉のときのように孔弥は曖昧になる。そしてその後にきっと。

「コーヤ」

遊理とキスをするのだ。

4'

　ひと抱えほどの、白い影。最初、＜それ＞は猫に見えた。けれど遊理に気づいて＜それ＞が頭を持ち上げた瞬間、もう猫ではなかった。

「ウサギだわ」

　ぴくり、と長い耳を動かし、後ろ足で立ちあがったウサギは、青いカーディガンを翻して扉の方へ跳ねていく。澄んだ音がして、小さな扉が閉まる。微かに施錠の音もしたような。

「どうしたの」

　孔弥が驚いてやってくると遊理は扉を指さした。

「ここに入っていったわ」
「なんだろう」
「ウサギ、青いカーディガンを着た白いウサギ」
「ウサギ？」
「そう」

　木製の扉には真鍮で美しい修飾が施されている。優雅な曲線を描くドアノブと、同じ真鍮でできた重そうなノッカー。

「どれ、開けてみようか」
「鍵が掛かってるかもしれない」
「開けてみないとわからないよ」
「そりゃ、そうね」

　孔弥が扉を押すと、澄んだ音をたてて扉が開いた。

＊

　扉の向こう側のことを、遊理も孔弥も覚えていない。なぜ扉を開けようと思ったのかも、たいてい忘れてしまう。

「おじいさんじゃないかしら」

　遊理は言う。

「ロマンスグレーの、素敵な紳士よ、きっと」
「バーンスタインみたいな」
「そう、バーンスタインみたいな」

　あるかどうかもわからない扉の向こう側について話す時、二人はたいていそんなふうだった。わからないものについて話す時、二人はどうしても核心に近づくこ とができない。核心のように思えるものはいつもぼんやりとしていて、掴んだと思うとばらばらに散ってしまう。不可避的な力で、核心から遠ざけられているよ うに。

「素敵ね、私のために何か演奏してくれないかしら」

　孔弥は笑う。

「僕が演奏するよ」
「楽器がないわ」
「それなら歌うさ」

　孔弥は思い出せるもののうちで一番近くにあった歌を歌う。それは歌というよりもお話に近い。遊理はそれを聞きながら、ベッドの上で寝がえりをうつ。

「いい歌」

　孔弥が歌い終えると言った。

「そして新しい日が、僕らを明日に連れてってくれるだろう」
「新しい日ってどんな日かしら」

遊理は眠りかけながら言う。

「明日なんてもうないのに」

静かな寝息の傍で孔弥は暗くなっていく部屋を見渡す。

　あの日、孔弥が遊理を見つけた日、遊理の体は雨のせいで冷え切っていた。動くことを忘れてしまったように、遊理は棒のように立ち尽くして、あんまり長い間そのままでいたので、孔弥が触れた途端、生きている体ではありえないような仕方で倒れた。顔面から水たまりに突っ込んだ遊理は、自分で起き上がることもしない。孔弥はあわてて遊理を引っ張り起こすと、膝の上に抱えあげた。黒く沈んだ瞳が、遠くを見ているようでも、近くを見ているようでもなく、ただ開かれ揺れている。微かに震える睫毛の奥、その瞳の中につぎつぎ雨粒が飛び込んでいく。眼球を雨が洗い遊理の目の淵から溢れる。

「みんないないわ」

　色を無くした唇が飲みこむように動いた。

「もうみんないない」

　それを見て、孔弥は初めて声をあげて泣いた。遊理に会うまでに多くのことが起こって、あんまり多くのことがいっぺんに起こったので、泣くのを忘れたままだった。遊理はぐったり動かなかった。静寂そのもののようにして、孔弥の膝の上で横たわっていた。孔弥だけが動くもののように、泣き続けた。

　いろいろなことをいっぺんに思い出した。あとからあとから覆いかぶさるように、孔弥の記憶に積み重なっていった。孔弥は頭が全体に重たくなるのを感じた。あまりに多くのことを思い出しすぎて、頭痛がし、鼻水に血が混じり、耳鳴りがした。喉の奥で鉄の味を感じた。

　そう、色々なことが起こった。色々なことが起こって。

「みんな死んだ」

　もうみんないない。

　雨で濡れているのか、涙で濡れているのかわからない頬を、遊理は手の甲でふいた。冷たかった。孔弥がなぜ泣いているのかわからない。ただ冷たかった。ぬぐってもぬぐっても、孔弥の頬は濡れていた。遊理の中でいくつもの言葉が形を作りながら、また崩れて消えていった。ひとつも音にできないまま、遊理は孔弥の頬をぬぐい続けた。やがて、孔弥の手が遊里の手を取り、自分から引き離した。孔弥の手もまた、冷たかった。

「なぜ泣いてるの」

　孔弥の目蓋が首筋に触れ、その端から流れるものがあまりに熱かったので遊理は驚いた。

「あなたの目は熱い」

　確かめるように遊理は言う。あなたの頬は冷たい。あなたの目は熱い。あなたの手は冷たい。

「みんないないわ」

　孔弥はゆっくり顔を上げた。

「僕はいる」

　ここにいる。

Q

　部屋がゆっくり時間を動かす。降り続けている雨のことを遊理は思う。冷たい雨、冷たい頬のことを。色調がグレーからやや青みがかった白い光に移り、明度がゆっくりおちる。夜の色、夜の星空の色。いつか見たはずの空の色。

「懐かしい」

　ふと遊理は口に出した。

「私、この空を見たことがある」

　まだ、

「まだ」

　あれはいつだったろう。

「僕の空は、いつも雨が降っている」

　部屋の外では雨が降っているだろう。今もまだ、降り続けているだろう。

「あの空」

　でも、どの空だったろう。遊里の中で何かが、がちゃん、と閉じられる。心臓が、ひゅう、と一瞬息をひそめる。澄んだ扉の音がする。扉、

「これは」

　部屋は急速に明度を落とし、天井に広がるきらめきが本物の星のように瞬きだした。

「星」

　星、星、眩暈がするほど無数の星、けれど有限のはずの星。　止まりかけた心臓が、今度はとめどなく脈打つ。孔弥。

「コーヤ！」

　驚いた孔弥が遊里を見る。遊理は大きく目を見開いている。

「本物だわ」
「本物？」
「雨なんかもう降ってない」
「きっとまだ降ってるよ」
「違う、違う」

　遊理は勢いよく起き上がる。部屋が僅かに身震いをしたようだった。

「ここは部屋の中」
「そう」
「部屋なのよ、わかる、孔弥」
「わかる」
「それなら、部屋の外はどうなったの」

　部屋の外では、まだ雨が降っているだろう。

「雨はまだ止んでないし、これからもきっと止まない」
「違う、雨なんてもう降ってない！」

　遊理は叫んだ。

「わからないよ、だってここには窓がない」
「なぜ窓がないの、考えてごらんなさいよ」
「なぜ窓がないかだって」
「わからないわ、わからない、わからないから考えて、私の代わりに」

　孔弥。

「考えて」

「なぜ窓がないのか」
「なぜ部屋の外へ出ていかないの」
「なぜここにいるのか」
「なぜ私たちはここにいるの」
「なぜ僕たちはここにいるのか」
「なぜ、ここなの」

　部屋が大きく胎動する。呼吸するように伸びあがったかと思うと、明滅を繰り返し、その直後、真っ白な光が、温度のない薄情な光が、真っすぐに、射て差すように、遊理と孔弥を包みこんだ。

「光が！」

　光の中で、何も見えない。

B

　青いカーディガンを着たウサギが入っていった扉の向こう側、真っ白な部屋の続き。ウサギはどこにもいない。部屋のはるか彼方に一台の黒いグランドピアノが置いてあって、黒いタキシードを着た老人がよろよろと演奏している。ピアノの側面には金色のアルファベットでビー、オーウムラウト、エス、イー、エヌ、

「この演奏は1958年のものだ。オケはニューヨークフィル、ラヴェルの新しい演奏会への期待と不安が伝わってくるだろう！」

　ディ、オー、アール、エフ、イー、アール。

「ボーセンドーファー？」

　タキシードの老人は怒ったように頭を振った。

「何を言ってるんだ、これはラヴェルだよ、ラヴェル！」

　ピアノの鳴りたてるような音はどんどん激しくなっていく。音と音の間に音が入りこみ、その間にも音が入りこみ、音の間が音で埋め尽くされていく。老人のまばらに髪の落ちた頭ががくがくと鍵盤の上で震えて取れそうになっているので、遊理は怖くなって目を逸らす。音は鳴りわめき遊理と孔弥の上に容赦なく降り注ぐ。こんなにたくさんの音を遊理も孔弥もずっと聴いたことがなかった。あの日からずっと、二人は静寂の中で過ごしてきたのだ。音はとめどなく続き、連続し、やがてノイズのようにあらゆる音が混ざりあい、一瞬ののちにすべて消える。

「ああ、すばらしい！」

　老人は自らの演奏に感動しうち震えている。孔弥はその白髪に見覚えがあった。皺だらけではあったが、その顔を見て、ようやく孔弥はその名を思い出す。

「こんにちは、バーンスタインさん」

　孔弥はなるべく失礼にあたらないように慎重に挨拶をする。

「いったいいつからここに？」

　バーンスタインは譜面立てに肘をつくと、面白そうに孔弥を見た。

「いつから？　いつからだったら君は納得するのかな」
「さあ、僕にはわかりません」

　遊理は音が止んだのに気づいて顔をあげた。

「私にもわからない」
「なるほど、二人ともわからない。これはけっこう」

　愉快そうに笑い声をたてると、バーンスタインは脚を組み直す。

「それじゃこうしよう。私はずっとここにいた、あるいは今からいる」
「そんなの」

　孔弥はぐったりして応える。

「嘘です。だってピアノの音なんてひとつも聞こえなかった」
「君の歌はなかなかよかったな」
「聞いてたんですか」

　孔弥は耳が赤くなるのを感じる。それじゃもしかして、遊理と孔弥がたてた色々な音のことをこの老人は知っているんだろうか。

「ウサギを知りません？　ここへ入ってきたはずなの」

　遊理は部屋の中をぐるりと見回しながら尋ねる。部屋は相変わらず白く、ピアノとバーンスタインだけがくっきり浮かび上がっているようだ。

「ウサギなら行ってしまった。もう戻らないだろう」
「行った？」

　孔弥は聞き咎めるように言う。

「ここから何処へ行くっていうんですか」

　白髪のピアニストは目を細めて遊理と孔弥の後ろを指さす。

「ドアはそこにしかない。そしてそこから出て行ったよ」
「でも、僕たちはそこから来たんです」
「断言できるのか、すごいね」

　そう言うとバーンスタインは楽しそうにパチンと指を鳴らす。部屋が唐突に身震いすると、ピアノの向こう側にもう一つ扉が現れた。

「君たちが来たのはあそこからだ。私が決めた」
「そんな」
「さて」

　そう言うとバーンスタインは再びピアノに向かう。

「そろそろ続きが気になる。演奏に戻るとしよう。次はあの物悲しくも美しい第二楽章」

　指を鍵盤の上に軽やかに載せ、今にも弾こうとしているときに、孔弥も気づかない間に遊理が、その横に立っている。

「バーンスタインさん、教えてください」

　老人は迷惑そうに遊理を見る。

「あの扉は私たちも通れるの」
「通りたいなら通るがいい。帰る道はないがね」
「あなたはどうして知っているの」
「なぜなら私はレナード・バーンスタインだからだよ！」

　そう叫んで始まったのは第二楽章ではなく第三楽章だった。飛び跳ねるようなテンポの中で部屋はどんどん扉を増やしていく。ひとつ、ふたつ、よっつ、やっつ、

「ああ！」

　遊理が孔弥の腕の中に飛び込んでくる。

「ひどいわ、もうどれがどれかわからない」

　扉は壁面いっぱいにひしめき合って今にも二人に襲いかかってきそうだ。部屋の中央では老人が相変わらずピアノを叩いて頭を振り乱している。いや、もう老人の姿はなかった。ただピアノだけが、ピアノの影が、ピアノの轟音が、リズムが、響きが、残響が、遊里と孔弥の頭を今にも割りそうに充満しているのだ。

「やめろ！」

　孔弥が叫ぶ。音が消え、扉が消える。そして光がやってくる。

K

　いつものように。
　扉を開けたのか開けていないのかひとしきり話し、解決をみないやりとりの最後、遊理と孔弥はキスをする。ベッドに潜り込む前に苺酒で晩餐を終え、先にあくびをした遊理が言う。

「部屋が明るい」

　部屋は遊理と孔弥を包み、守り、まどろみを与え養う。降り続ける雨のこちら側で、二人に空間を与える。一日はたいていハムエッグで始まり苺酒で終わる。そうして終わる頃には部屋の明度は月明かりほどになり、ベッドのある場所だけが青白く浮かび上がる。それなのに、今日はいつまでたっても、白く光り輝き、日曜の晴れた遅い朝のように暖かな色合いのままだ。

「これじゃ、眠れない」

　それに、忘れることもできない。

「忘れるって、何を」

　扉の向こう側で見たことを。

「ウサギのことかしら」

　あるいは、見間違えた猫のことを。

「音だけが残ったピアノのことかしら」

　あるいは白髪のバーンスタインを。

「ピアノ、ピアノってなんのこと？」

　孔弥は遊理を背中から抱きしめる。部屋は沈黙している。光は少しずつ白くなる。少しずつ色の温度を失う。

「コーヤ」

　遊理は怖くなる。

「コーヤ、私はここにいていいの」

　孔弥は遊理の頬に触れる。黒い髪、白い肌、遊理の肌。

「いい。　ユーリ、いいんだ」

　遊理のとび色の瞳が孔弥を捉える。孔弥の瞳が遊理の中にいる孔弥を捉える。

「じゃあ、あなたは」

　怯えたように揺れる瞳の中で孔弥はひどく真剣な顔をしている。

「僕もここにいる。　ユーリがいるところにいる」
「でも」
「僕はユーリがいるところにいる」

　遊理は孔弥の瞳の中で、怯えた自分を見つける。輪郭がぼやける。瞳の灰色の中に白い光が満ちていく。

「だって、僕がユーリを見る時、ユーリは僕を見るだろう？」

　遊理は目をこする。薄い皮膚が赤くなる。

「でも、コーヤ、もうなんだかずいぶん眩しいみたい」
「そうだね、すこし眩しい」

　テーブルが消え、椅子が消えた。ベッドが消え、キッチンの扉が消えた。菜園への道も消え、菜園から、あの部屋へ繋がる扉も消えた。ウサギも、バーンスタインも消えた。

「もう雨は止んだかしら」

遊理は誰かに呼ばれたように後を振り返る。

「私、行かなきゃ」

孔弥の中から、遊理の感触が消える。

　みんないなくなった。その空の下で遊理と孔弥は雨に打たれていた。ときどき酷い嵐が起こり、地面に落ちた色々なもの、建物の一部や、草木の一部、あるいは根こそぎを持ち去った。二人は時々、ひどい吐き気を催して吐いた。眩暈がし、立っていられないこともしばしばだった。遊理は孔弥を支え、孔弥が遊理を支えるようにして二人は歩き続けた。どこへというあてはなかった。あてはなかったが、立ち止まることは許されなかった。そこはもう、立ち止まっていられるような場所ではなくなっていた。

　シェルターをいくつか通り過ぎた。そのいずれも酷い有様だった。天井ごと陥没したり、高温になりすぎて中で人が炭になっていたりした。小学校では子供たちが机の下で力尽きて、病院のベッドでは寝たきりの患者たちがベッドだか患者だかよくわからないひとつの塊になっていた。遊理も、孔弥も、自分たちがなぜ生きているのか不思議でならなかった。もしかしたら、自分たちももう死んでいて、その思念だけが残ってこうして彷徨っているだけなのかもしれない。幾度となくそう思った。だが、それならば胃の底がひっくり返りそうな嘔吐くらい、無くしてくれてもよかったのに、と思い、もしこの苦しみが肉体によるものなら、きっとまだ生きているのだ。そう信じた。

「シャトルが飛んでいくのを見たわ」

　遊理は道路にできた小さなクレバスをようやく飛び越えた後に言った。

「誰か乗っていたのかしら」
「定期便は随分前に止まってしまったね」
「こんなふうになるなら、もっと前に移住しておけばよかった」
「宇宙は孤独だと聞いたことがあるよ」
「今のここよりましだわ」
「それでも生きていけないなら、同じことじゃないかな」
「そうかもしれない」

　遊理が息をのんだ。

「ああ、見て」

　雨が止む。通奏低音のように鳴り響いていた雨音が消えた。

「今って、夜だったのね」

　急激に流れた雲の向こう側を見ながら遊理は言った。

「綺麗ね」

　オーロラだった。孔弥はそれを見て戦慄した。こんな場所でオーロラが見られるわけがないのに。青緑色に強く光り輝くオーロラを見ながら、遊理はもう一度ゆっくり呼吸する。

「オーロラは好き」

　こんなときでも。

A

「出てはだめだ」

　孔弥は叫んだ。

「ここから出たら」

　ここから出たら。

「消えてしまうよ」

　遊理が孔弥を見、孔弥が遊理を見る。互いに存在を許し合い、確かめ合うためだけの場所、最後の場所、部屋、小さな籠の中。ここを出たら、遊理は生きられない。遊理がいなければ、孔弥も生きられない。遊理を見る孔弥を、遊理が見ていた。

「だって、オーロラがあるでしょう」

　遊理は歌うように言う。

「星空があるでしょう。何万光年も彼方からの光が、私たちを包むでしょう」

　そして私たちは消えるでしょう。

「あの光みたいに」

　ばらばらになって。

「コーヤ」

　孔弥。

「私はここにいる」

　僕はここにいる。

「消えてしまうなら、もう一度私を呼んで」

　光に亀裂が入り暗闇が奔流のように侵入してくる。

「ユーリ」

　そして消える。
　部屋の光が落ち、オーロラと、星空と、大地が残される。すべてが元通りになり、遊理と孔弥だけがいない。

This story was inspired by the song "luv (sic)."

http://www.youtube.com/watch?v=WCmT8QMyUwU

(歌詞：英語原文)

http://www.e22.com/shing02/lyrics/lx_lv_e.htm

(日本語対訳)

http://www.e22.com/shing02/lyrics/lx_lv_j.htm

Thank you !

luv sic

http://p.booklog.jp/book/25940

著者 : 道玄坂杏子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/dogenzakakyoko/profile
twitter：http://twitter.com/dogenzakakyoko

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25940

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25940